D-2～D-7　（分科会　6 月 12 日(土)14:30～17:25　N312 教室）

【分科会】

人類学で/を豊かにすること：人類学の拡張可能性を考える

【代表者】

伊藤泰信

「人類学で/を豊かにすること：人類学の拡張可能性を考える」

伊藤泰信（北陸先端科学技術大学院大学(JAIST)）

「ビジネスと人類学：人類学で／を豊かにしうるか」

伊藤泰信

「高齢者研究／事業と人類学：異質なモノとしての隣接・他領域に対峙する」

後藤晴子（九州大学大学院人間環境学府博士後期課程）

「STS と人類学：科学的合理性を揺るがす」

春日匠（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）

「子ども研究と人類学：子どもの視点と『子ども』という視点」

針塚瑞樹（筑紫女学園大学非常勤講師）

「開発研究と人類学：『障害と開発』研究との対話」

亀井伸孝（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

コメンテイター

飯嶋秀治（九州大学）

D-2〜D-7　（分科会　6 月 12 日(土)14:30〜17:25　N312 教室）

人類学で/を豊かにすること

人類学の拡張可能性を考える

伊藤泰信（北陸先端科学技術大学院大学（JAIST））

人類学は今日、他領域・他分野の学問的成果・影響を無視して安住することはできないことに議論の余地はなかろう。また、世界はますます複雑化し、人類学者が対峙する世界ないし現場には、（A. ワインバーグの言葉をもじって言えば）人類学にも問うことはできるが、人類学（だけ）では答えることのできない問題群ばかりである。人類学者が対峙する様々な現場で、他領域・他分野の研究者のみならず、（時には人類学者と競合関係になるような）実践・実務者と行き会う機会も多く、それらの存在も人類学者は無視できなくなりつつある。

「人類学で／を豊かにすること」がここでのキーワードである。これが意味するのは、一方で、他領域の研究や実務活動等を、人類学「で」豊かにできないか（人類学が他領域（学・実践）に貢献しうるとすれば何か）という問いと、他方、他領域の研究者や実務者らの知見、あるいはそれらの人々との協働（に伴う齟齬・摩擦等）の経験によって人類学「を」豊かにできないかという問いの、双方向を同時に意識化・対象化し、他領域との関係において、人類学の可能性や可変性・拡張可能性を考えようということである。

・人類学「で」他領域を豊かにする

人類学が実践に役立つか（人類学で実践を豊かにしうるか）といった形で、ある意味、様々なヴァリエーションでもって論じられてきた。例えば、開発援助の実務者よりも、現場の文脈に通じた人類学者の情報が、開発される側の住民の目線に立った情報を提供しうる、施策者中心主義的な開発援助の歯止めになる、といった議論であり、枚挙にいとまがない。実践的なもののみならず、より一般的に言って、そもそもグランドセオリー（西欧出自の一般理論・普遍理論）を、異質な周辺的事象の知見をもって突き崩す・揺るがすというベクトルを人類学は内包していたことから、人類学「で」他領域を豊かにしてきたとも言い得るが、これをまずは（後述の問いと共に）改めて対象化する。

・人類学「を」他領域の知見でもって豊かにする

上記の問いのみならず、翻って(あるいはそれを通じて)、人類学をも豊かにする視座を得る、という逆のベクトルをどこかに確保したいと考える。人類学が他領域・他分野から理論を摂取し、あるいは実践的な経験から示唆を得、豊かさを増してきたことは言を俟たない。老舗の社会学・民俗学・生態学などから、文学理論や認知科学、科学技術社会論などに至るまで、隣接他領域と密な関係を保ちつつ、それらの分野と理論的な相互乗り入れを行うようになってきている。（20数年前のC. ギアツの言葉を拝借して）ジャンルはますます薄れゆく状況にあると言えようか。人類学／人類学以外という理論の切り分けは容易ではなく、何がコンベンショナルな人類学の議論なのか、にわかに判断しがたいほどである。

そうした中（そうしたことも踏まえつつも）、本分科会でも他領域の理論の摂取という視点は外さないが、ここではそれとは異なる視点をも想定している。R. ノランは、開発の実践が「人類学者を成長させ、変化させ、その過程で人類学の基礎と目的を再考させるための触媒である」（2002=2007: 65）と述べている。この指摘を開発分野に特化した議論に限ることなく、それ以外の領域にも押し広げたい。他領域の研究者との協働の経験や、実践・実務との（コンフリクトなどをも含んだ）関わりが、人類学(者)「を」豊かに悩ませるものとなりうる（人類学をより豊かにする）、と捉え返そうということである。

これらによって、他領域との関係・対比の中で、他領域との関わり・協働の中で、人類学という学の個別性を問うことにも繋がり、また、人類学がどのように自らを変化・成長させうるかを問うことにも繋がっていくと考える。

このような双方向的なリサーチクエスチョンを本分科会の特徴としつつ、人類学とその他の領域（学・実践）とのバウンダリーや関係性をエスノグラフィックに観察することを、具体的な作業課題として設定した。○○と人類学、○○学と人類学との関係性を人類学的に考える、メタ人類学的な視点をどこかで保持した具体的な諸報告が並ぶはずである。報告者は、伊藤（ビジネスと人類学）の他、亀井伸孝（開発研究と人類学）、春日匠（STS と人類学）、針塚瑞樹（子ども研究と人類学）、後藤晴子（高齢者研究／事業と人類学）、および飯嶋秀治（コメント）である。

【参考文献】

Nolan, R., 2002, Development Anthropology. Westview Press.（＝2007，関根久雄・玉置泰明・鈴木紀・角田宇子訳，『開発人類学――基本と実践』古今書院.）

【 人類学で豊かにする、人類学を豊かにする、○○と人類学、○○学と人類学 】

D-2〜D-7　（分科会　6 月 12 日(土)14:30〜17:25　N312 教室）

ビジネスと人類学

人類学で／を豊かにしうるか

伊藤泰信（北陸先端科学技術大学院大学（JAIST））

本発表のタイトルは 「ビジネスと人類学」である。経営（ビジネス）をめぐっては、人類学者・経営学者を中心とした学際的で先駆的な国立民族学博物館共同研究が「経営人類学」枠組みの開拓に成功しており、すでに会社文化・企業理念について、実証的でかつ厚みを持った議論が蓄積されてきている［中牧・日置編 1997, 2007; 住原・三井・渡邊編 2008］。発表者は、それらに大いに刺激を受けつつも、ここでは、企業（ビジネス）文化そのものというよりは、ある種のメタ人類学的視点から、ビジネスと人類学との関係性を議論の俎上に載せようとするものである。

ここ数年、日本の産業界・ビジネス界においてエスノグラフィーに熱い視線が注がれている。企業人向けの、消費者行動把握や製品のデザインやユーザビリティ、組織の業務改善などに使えるエスノグラフィーのフォーラムやセミナーなどもあちこちで行われている。こうしたビジネス分野でエスノグラフィーがもてはやされているのは日本だけではない。むしろここ数年、日本にもそうした波がやって来たのだと言って良い。欧米、とりわけ北米では、人類学のエスノグラフィーがビジネスに使えるものとして早くから提供されており、1990 年代あたりから人類学が「商業的に意味のある学問」とされるようになってきたという［Suchman 2003］。

発表者は2009 年度の日本文化人類学会大会において、発表者がこれまで行ってきたニュージーランド先住民の学（Maori Studies）と人類学との関係性の分析の枠組み、すなわち社会システム論に基づいた学システムの閉鎖性のテーゼを援用した分析の枠組みを導きの糸とし、援用しながら、人類学とその外部（実務・ビジネス界）で生起している（上記の）事象について素描した。学（人類学）と実務（ビジネス）とを、社会システム論的見地から見れば、それぞれのシステムが別様の論理によって稼働する。それを前提に言えば、人類学は（他の学問分野同様）、学の内部の論理に基づいて自律的に稼働し、ビジネスは、ビジネス上の論理（経済合理性や効率性、およびそれに基づく意志決定）で自律的に稼働することが観察されるはずである。学の論理、実務（ビジネス）の論理の違いに注目しつつ（とりわけ、学との対比で、ビジネスの論理を明るみにしながら）両者の境界を注意深く観察することを研究プログラムとして提示することが2009 年度の発表の主題であった。

本発表では、その後の発表者による調査研究の進展も紹介しつつ、ビジネスと人類学との関係性を論じるなかで、分科会の趣旨説明文で述べた、他分野との関係性のなかで「人類学で／を豊かにすること」を軸として議論を行う。人類学「で」豊かにするというベクトルについて言えば、消費者行動調査、製品のデザイン・ユーザビリティ研究、業務改善調査に人類学（の視角や調査手法）が注目され、用いられつつある上記の動向は（その是非は別として）ある意味、ビジネスを豊かにするベクトルを持っていると言える。（ビジネス‘の’人類学と対比的な）そのようなビジネス人類学が「人類学で豊かにする」ものだとすれば、「人類学を豊かにする」方向性の議論として、以下のものを想定している。

・ビジネス・実務分野で人類学的手法の摂取に取り組み、その開発（カスタマイズ）・商品化に努めている企業内研究者・実務者たちとの対話・対峙（ひいては人類学とは相容れない志向性をもつ異分野との対話・対峙）が、人類学を豊かにする可能性を秘めていると考える得ること。

・人類学外部で、企業の論理で実際に動いている事態と人類学的な知見とを調和させようとすること、時には企業の論理で不自然にカスタマイズされているように（こちら側からは）見えるエスノグラフィーと向かい合ってみること、は思考実験として我々人類学徒にとっていくぶん必要かもしれないということ。

・そのような思考実験、すなわち、自身が訓練を受けてきた「当たり前に」学問するという経験が揺り動かされること（発表者じしん、カルチャーショックを受けたこともある）もまた、興味深い、人類学を豊かにする実践と言いうるのではないかということ。

・さらには、一般論として（趣旨説明文でも言及したように）人類学者が向かい合う様々な現場で、他領域・他分野の研究者のみならず、（時には人類学者と競合関係になるような）実践・実務者と行き会う機会も多くなっている。それを等閑にするのではなく、他分野（人類学とは異質な論理をもつもの）との対話や協働をいかに考えるべきかという問題提起に繋げること。（場合によっては、単独で・独自の学的論理でフィールドに立つ人類学者という自己イメージも変わるかもしれない。）

何がアカデミックな人類学で何がそうでないのかといった、学／実践・実務という線引きの再考も含め、本発表では、将来的な人類学の「他でもあり得る」可能性・可変性を考えるための端緒を見出したい。

【 産業系エスノグラフィー、ビジネスの論理、学の論理、人類学の可変性 】

D-2〜D-7　（分科会　6 月 12 日(土)14:30〜17:25　N312 教室）

高齢者研究／事業と人類学

異質なモノとしての隣接・他領域に対峙する

後藤晴子（九州大学大学院人間環境学府博士後期課程）

本報告の目的は、「老い＝Aging」を対象に「人類学する」ことによって得られた知見の報告ではなく、報告者が「老い」を研究対象として掲げるなかで偶然（もしくは必然的に）関わることになった、隣接・他領域（特に老年社会科学）の高齢者研究および地方都市の中小企業が行った高齢者向けサービスの起業へむけての事前調査プロジェクトへの参与によって経験した違和感、いわば断絶の経験から、異質な隣接・他領域との新たな議論の可能性を探ることにある。

近年日本においても人類学的なAging研究（老年人類学、というべきもの）が盛んになりつつあるが、日本の人類学者が取り組むよりもずっと以前からそれに関わる議論を熱心に行ってきたのは、老年学（Gerontology）と呼ばれる分野である。「高齢者／高齢社会」の研究を牽引してきた老年学は、老年医学、老年歯学、老年精神学、老年社会科学（社会学や心理学、福祉学など）などその研究領域は多岐にわたっており、そこで行われている議論も、大きく生物学的理論、心理学的理論、社会学的理論に分けられる。しかしながら最近ではその多くが実証研究で占められ、エイジングの理論化にはほとんど関心が払われていない。またそこでは「高齢者の社会参加の可能性を探るための議論」（サクセスフル・エイジング、アクティブ・エイジングなど）が中心となっており、「老いとは何か」といった中身に関する問いが発せられることはそう多くはない。つまり多かれ少なかれそこには、「望ましい高齢者像」と高齢者（もしくは高齢社会）を「社会問題」とし、それを「なんとかしなくてはならない」といういささか強い問題解決志向が存在しているように思われる。

このような状況は、こうした状況に対し違和感を抱きつつ、これまで沖縄離島や福岡市近郊の真言宗寺院をフィールドに、「老いの経験」や「老人（高齢期）と宗教との関係性」をそこで生きる人びとのライフヒストリーや、日常の些細な出来事の参与観察によって明らかにしようとしてきた報告者にとっても、まったく無縁のものではない。なぜならば、たとえ報告者のような立場や研究内容であっても、その中身に関わらず「老いの研究」を掲げること自体が、多かれ少なかれ（好むと好まざるに関わらず）先に述べたような価値志向や問題解決志向を持っていると想定されうる状況が出来あがっているからである。

本報告では、このような１）老年学と報告者のこれまでの研究の関わりとともに、２）報告者が「老いの研究」を掲げていたことがきっかけで、2006年末から2007年にかけて偶然関わることになったとある地方都市の中小企業の高齢者向けビジネスの起業プロジェクトへの参与の経験を取り上げる予定である。先にあげた志向性は、老年学という学問領域だけに限られた話ではない。たとえば、高齢者向けサービスといったビジネスが関わる場面では更に強くその事業の価値や必要性とともに、（アカデミズムとは異なる文脈で）あるべき高齢者像が示されている。そこでは人類学的なローカルな視点が市場の需要をくみ取る有効な方法として評価される一方で、（たとえそれが起業前の事前調査という段階であっても）明確に「市場としての高齢者」が想定され、「結果を出す＝（事業として）成功させなければならない」という前提とともに展開される現実がある。もちろんこうした現場や実践に強くコミットした研究が人類学の中でも近年盛んになっているが、このいささか強い志向性（とそれに伴う違和感）を理由に、距離を保つといった態度は、これまでも／これからもわれわれの取りうる態度の一つでありうるだろう。だがその違和感を起点にお互いを眺めなおすことの中にも議論の可能性は開かれているのではないだろうか。

これは報告者にとって異質な隣接・他領域の志向性に対する批判ではない。また近年人類学内部でも盛んになっている、実践における人類学の可能性の探求とも異なると考える。むしろそうしたアクションとは一歩も二歩も引いた立場から他領域に対峙し、それを「乗り越えるべきもの／うまく付き合っていくもの」としてではなく、「なかなか相容れないもの」として議論の俎上にあげることによって、アクションの視点とは異なる「人類学で／を豊かにすること」の一断面を示したい。

【 Aging、老年学、サクセスフル・エイジング、高齢者向け事業 】

D-2〜D-7　（分科会　6 月 12 日(土)14:30〜17:25　N312 教室）

STS と人類学

科学的合理性を揺るがす

春日匠（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）

文化人類学が「科学」を対象にする機会が増えてきたと言える。第一に、ラトゥールらによって始められた、研究者の実験室（ラボラトリー）を、従来人類学が課題にしてきた村落共同体のように「参与観察」するというラボラトリースタディーズがある。こういった研究は通常、科学的合理性にのみ基づいて発展していくと考えられている科学が、個々の知識が産出される状況に依存したものでもあることを明らかにしてきた。また一方で、通常「迷信」などと呼ばれ非合理なものと考えられている民族的な知識や慣習を、「ローカル・ノレッジ」という観点から見直す作業も進められてきている。こういった知識が製薬などの分野で商品化につながることや、防災面での応用が期待されるなど、思わぬ恩恵をもたらすことも珍しくはない。このことは、文化人類学が純粋にアカデミックな営為にとどまらず、社会的・経済的に様々な影響を与えうる権力性を帯びているということでもある。

こうした状況を示す、もっとも顕著なフィールドはインドの農村である。多くの自然科学者や農村開発に係わる関係者は、60 年代に行われた高収量品種と灌漑技術の大規模な導入、所謂「緑の革命」が食料の生産性を向上させたと考えており、またこれを遺伝子組換えによる新品種の導入で再現可能であると考えている。これらの論者によれば、遺伝子組換え作物の導入は、今後見込まれる人口増加に対応するためになくてはならない技術と言うことになる。一方で、NGO活動家を中心に、これに反対の議論が存在する。インド出身の人類学者などの支持も得ているこれらの見解によれば、緑の革命はインド社会に恩恵以上に荒廃と対立をもたらしたのであり、遺伝子組換え作物の導入も同様の結果に終わることが予想されるということになる。特に問題視されているのは、先進国の技術に農村が依存することにより、それまで統合されていた品種改良と生産の現場が分断され、農民が代々培ってきた品種に関する知識が失われてしまうことになることである。ここでは、開発援助の名の下に、知識の収奪が行われている、と主張されているのである。このように、科学技術が個別の状況下でどのように機能するか（Science in Action）という観点から見てみれば、実験室的あるいは教科書的に理想化された状況とはまったく異なる「科学」がそこにあり、倫理的、法的、社会的あるいは経済的といった、様々な観点からの検討を要することが見て取れる。その際、異なる評価軸をおけば合理性の評価基準が一変したり、また論理階梯ごとに異なる合理性が発現したりする（例えば「共有地の悲劇」のような）こともあり得る。サイエンスにおける合理性は通常、普遍的でゆらぎのないものだと思われているが、少なくとも個々の現場においてサイエンスが駆動するとき、その合理性は揺らぐのであり、フィールドワークにはそのゆらぎを顕在化させる機能があるだろう。

学問の合理性を疑うというような作業は、当然のことながら再帰的ないし対自的でなければならない。こうした「合理性のゆらぎ」に人類学が取り組むことは、人類学を他の諸学が応用的課題に取り組むさいの「役に立つ」という前提を問い直す、いわば「メタ応用」とでもいうべき場所に誘うであろう。90 年代以降、科学技術が日常性に深く関連しており、もはや専門家だけが議論しているのでは足りない、という認識が政策担当者の間に広まりつつある。そして、遺伝子組換え、BSE問題、ナノテクノロジー、気候変動などに関する政策決定で、広く市民の意見を募るような手法（コンセンサス会議など）が先進国のみならず第三世界でも一般的になりつつある。また、場合によってはこれらの論争の場が国境を越えて設定されることすらある。しかし、その趣旨は立派なものであったとしても、現実的にはそういった場で提示された「市民の意見」はしばしば、官僚や科学者といったエキスパートの「解釈」により、それらが持っていた文脈から切り離され、エキスパートの文脈に回収されてしまうことになる。こうした表象の「収奪」を議論することは、アイディンティティ・ポリティクスに関する議論の応用編という側面を持ってはいると言えよう。

このように、科学技術の複雑化と、それに伴い（広い意味での）「市民」が政策決定に係わることが求められているという状況は、文化人類学にとっては、二種類の収奪を顕在化させるという、新しいミッションをもたらしていると言えよう。

【 科学技術、市民参加、ローカル・ノレッジ、代表／表象 】

D-2〜D-7　（分科会　6月12日(土)14:30〜17:25　N312教室）

子ども研究と人類学

子どもの視点と「子ども」という視点

針塚瑞樹（筑紫女学園大学非常勤講師）

子どもを中心として書かれた民族誌的な記述は少ない。人類学において子どもを対象とすることは未開拓の状況であり、子ども期は未だ十分に表現も理論化もされているとはいえない。なぜ、子どもは人類学の研究対象として、正面から取り上げられてこなかったのだろうか。この問いは、人類学が自明なものとして想定してきた文化の担い手について再考を促すという意味で、人類学に新たな気づきをもたらす問いであると考える。本報告は、「子ども研究としての人類学」を考えることにより、子ども研究と人類学の拡張可能性について検討することを目的とする。

報告者は、路上生活経験のある子ども・青年たちに教育支援を行うインド都市部のNGO をフィールドとして調査を行ってきた。人類学的なストリートチルドレン研究は、子どもたちの貧しさなど物理的な環境を問題視するだけでなく、「子ども」という概念から外れる社会のアウトサイダーとしての子どもたちの経験を、子どもの有する対抗的・戦略的な潜在能力として評価する方向へと視点を移してきた。普遍的な「子ども期」を前提に「子どもとしての異質性」をポジティブに表象するストリートチルドレン理解に対して、報告者はインド都市部という文脈においてストリートの子どもたちが生きる「子ども期」を周囲の人々との関係性において捉え、子どもが路上で生活するという経験について考察を重ねてきた。ストリートチルドレンも子どもに普遍的な特徴である心身の未熟さを備えた子どもたちではあるが、NGO 職員、雇用主、警察官など「おとな」との関係において、こうした子どもたちは必ずしも保護の対象とはみなされずに、場合によっては自律して生活している。その「子ども期」はローカルな子ども観や「子どもの権利」の言説が錯綜するインド都市部において、どのような意味で周辺的であるのだろうか。おとな／子どもという境界がどのようなものとして設定されているのかが問われる必要があるだろう。

子どもを対象とした人類学的な研究においては、大人の認識、道徳、感情が世界をみるものさしとなってきた。ほとんどの民族誌的な記述の中で、子どもたち自身の声は、聞こえてこない。そこには子どもの語りの真実性に対する疑問があるわけだが、この疑問は子ども期を特殊なものして、大人の社会や規範から子どもとの関係を切り離して理解するという過ちによる。子どもを対象に調査することが、子どもが最終的に何者になるのかという視点からのみ価値づけられている限り、子ども期そのものは見えてこない（Scheper-Huges&Sargent1998:13-15）。

子どもを自らの生活や世界の構築に積極的に関与する存在としてとらえるために、子ども社会・文化という視点からの研究を蓄積してきているのが、子ども研究である。子ども研究は、「子どもを文化創造の主体ととらえる視点、子ども相互や子どもと社会との関わりを解明していくこと、子どもの生活を子どもの論理で捉えること」が必要であるとの認識に基づき、「子どもとは何か」という子ども存在の本質性と異質性を問いつつ、子どもと関わる学校や社会教育、福祉関係などの実践活動の記録をも重視している（子ども社会学会HP）。

本報告では、子どもを社会化の器としてではなく、子ども期そのものについて究明するという子ども研究の視点を受けて、なぜ子どもが人類学の研究対象となることが少なかったのかという問いから、人類学における研究対象としての条件を考えてみたい。また、主に子どもを研究対象とする教育人類学の課題が「社会において子どもが囲い込まれていく段階過程や、社会が「子ども像」を作り上げる過程を、フィールドワークという手法を用いて子どもに寄り添いながら実証的に研究することを通して、子どもの本質性と異質性について考究すること（松澤・南出 2002:141）」であるとき、子ども研究における人類学的なアプローチの貢献についても考え、「子ども研究としての人類学」から示される人類学、子ども研究双方への貢献についての考察の試みとしたい。

【引用文献】

松澤員子・南出和余 2002「文化人類学における子ども研究」『子ども社会研究』第8 号、子ども社会学会編、ハーベスト社

Scheper-Hughes,Nancy&Sargent,Carolyn(1998) Introduction: TheCulturalPolitics of Childhood, In *Small Wars The cultural politics of childhood*, California:University ofCaliforniaPress,pp.2-33

子ども社会学会 HP　http://wwwsoc.nii.ac.jp/jscs2/

【 子ども研究、教育人類学、「子ども期」、ストリートチルドレン 】

D-2〜D-7　（分科会　6 月 12 日(土)14:30〜17:25　N312 教室）

開発研究と人類学　「障害と開発」研究との対話

亀井伸孝（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

文化人類学者が、異分野・異なるテーマと出会う経験は、「相手の分野に何らかの貢献をする」だけでなく、新しい民族誌の可能性をもたらすという意味で、「文化人類学それ自体を豊かにする」ことができる、またとないチャンスである。

報告者は、2005-2009 年の4 年間にわたり、日本貿易振興機構アジア経済研究所の「障害と開発」をテーマとした2 つの共同研究に関わり、開発研究における新たな方法論を提言するとともに、並行して、人類学における新しい民族誌のあり方を模索してきた。本報告では、報告者の4 年間におよぶ共同研究への関与を総括しつつ、「参与観察という調査法がマイノリティの人間開発研究に寄与した面」と、「それを通してかえって文化人類学の側が得ることができた示唆の面」の双方を紹介しつつ、新たな民族誌の領域を開拓するための戦略について検討したい。

報告者は、2009 年度の日本文化人類学会大会における発表「生態人類学と『障害の社会モデル』」において、「生態人類学と『障害の社会モデル』という異なるふたつの領域は、それぞれ異なった背景と問題意識、研究の蓄積をもちつつも、実は同じことをしている」と指摘した。人間集団と自然環境の関係を明らかにすることを目的とする生態人類学と、障害をもつ個人／集団と環境の関係を明らかにすることを目的とする「障害の社会モデル」に根ざした研究は、いずれも対象となる人びとを資源利用と環境との関係においてとらえようとする点で、視点を共有している。

両者が類似しているという認識を前提に、報告者は、第一義的には、生態人類学的な参与観察と計量的な分析手法を、障害をもつ人びとの環境利用の調査に応用することを主張するスタンスをとった（人類学→開発研究）。

一方で、報告者は、開発研究ではすでに用いられていながら、人類学が十全に取り入れることができていないいくつかの重要な方法と視角を見いだし、それらを「人類学の側に持ち帰る」ことを意識するようになった（開発研究→人類学）。とりわけ重要なポイントとして、(1) 文化相対主義が従来あつかわなかった、身体の差異およびそれに関わる相対主義を、民族誌的研究のなかに公式に導入すること、(2) ネイティブ・アンソロポロジー（自文化人類学）の振興に関連し、開発研究が進める当事者参加の調査から人類学が学ぶべきこと、の二点が挙げられる。これらは、いずれも文化人類学の研究方法や対象、教育のあり方、理論的な枠組みにまで影響を及ぼしうる、重要な「帰り道の手みやげ」となった。

今日、人類学の「実践」をめぐる指向性がさかんに論じられている。また、実践のあり方も、開発（の）人類学を典型とする「調査地・調査対象集団に関する人類学的な知見の活用」にとどまらず、学校や博物館、地域社会やNPOでの関与と共働など、すそ野は広がっていると見られる。これらにおいては、人類学的な方法と知見を他領域に輸出し、学術界や関連領域における人類学のプレゼンスを高め、人類学者が職域を拡大することが想定されているかもしれない。

ただし、歴史を振り返れば、文化人類学は、隣接諸領域、たとえば生態学、民俗学、宗教学、社会学、農学などから方法、知見、人材を取り込み、その「雑種性」を長所として発展を遂げてきた。近年の「実践諸領域との出会い」は、人類学の変節と見るべきではなく、むしろ人類学の「雑種性の伝統」の上にあると見ることができるであろう。人類学が他の領域に「与えつつもらう」ために、同時代の新しい要素を取り入れる試みがいっそう奨励されてよいはずである。人類学者が雇われて仕事をすることも、また、多くの素材が魅力的なエスノグラフィーへと還流していく好機にほかならない。

【参考文献】

亀井伸孝．2009．『森の小さな〈ハンター〉たち』京都：京都大学学術出版会．

亀井伸孝．2009．「公務員無試験採用制度の達成と課題を中心に：コートジボワールの障害者の生計」『アジ研ワールド・トレンド』（日本貿易振興機構アジア経済研究所）168 (2009.09): 28-31．

亀井伸孝．2008．「途上国障害者の生計研究のための調査法開発：生態人類学と「障害の社会モデル」の接近」森壮也編『障害者の貧困削減：開発途上国の障害者の生計 中間報告』千葉：日本貿易振興機構アジア経済研究所．31-47．

桑山敬己．2008．『ネイティヴの人類学と民俗学：知の世界システムと日本』東京：弘文堂．

ノラン，リオール．2002=2007．関根久雄・玉置泰明・鈴木紀・角田宇子訳『開発人類学：基本と実践』東京：古今書院．

森壮也編．2008．『障害と開発：途上国の障害当事者と社会』千葉：日本貿易振興機構アジア経済研究所

【「障害と開発」研究、生態人類学、身体の差異、自文化人類学、雇われ人類学者 】